

4 年齢階級別の自殺の状況

年齢階級別の自殺者数について人口動態統計によれば（第1－6図）、男性については、昭和30年前後に15～34歳の階級が、60年前後に35～54歳の階級が、平成10年以降に45～64歳の階級がそれぞれ山を形成している。年齢階級ごとにみると、15～24歳の階級は昭和30年前後に非常に大きな山を形成した後は、大きな変動はみられない。25～34歳の階級は、昭和30年前後、50年代、平成10年以降に山を形成している。35～54歳の二つの階級は昭和60年前後と平成10年以降に山を形成し、15年以降、35～44歳の階級は高止まりを続けているが、45～54歳の階級は減少傾向である。55～64歳の階級は、昭和50年代末から増加傾向となって、平成10年に急増し、以後高い状態で推移してきたが、20年は、65～74歳の階級は2,923人で前年に比べ165人（5.3%）減少し、75歳以上の階級は2,132人で前年に比べ73人（3.3%）減少している。

女性については、昭和30年前後に15～34歳の階級が山を形成した後は、男性のような大きな変動はみられない。年齢階級ごとにみると、15～24歳の階級は昭和30年前後に大きな山を形成した後、減少傾向で推移している。25～34歳の階級は昭和30年前後にやや小さな山を形成した後、減少傾向で推移したが、平成10年に増加し、そのままの水準で推移している。35歳以上の階級は、昭和50年代までは、ほぼ同水準であるが、昭和60年代以降、75歳以上の階級が最も多い状態が継続している。また、平成20年は前年に

比べ44歳までの階級が増加している。特に、25～34歳の階級は1,203人で前年に比べ119人（11.0%）増加し、一方で55～64歳の階級は1,455人で前年に比べ161人（10.0%）減少し、65～74歳の階級は1,428人で前年に比べ64人（4.3%）減少している。

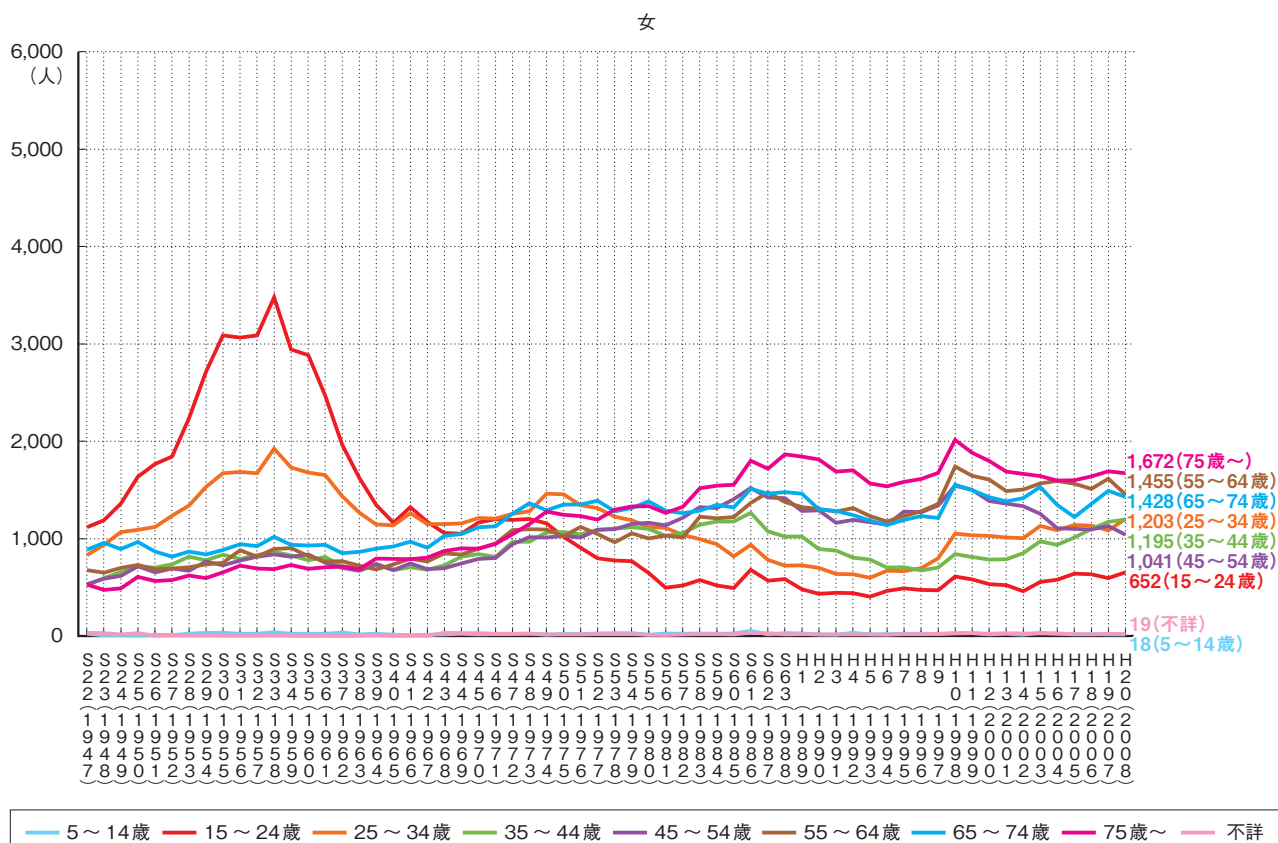
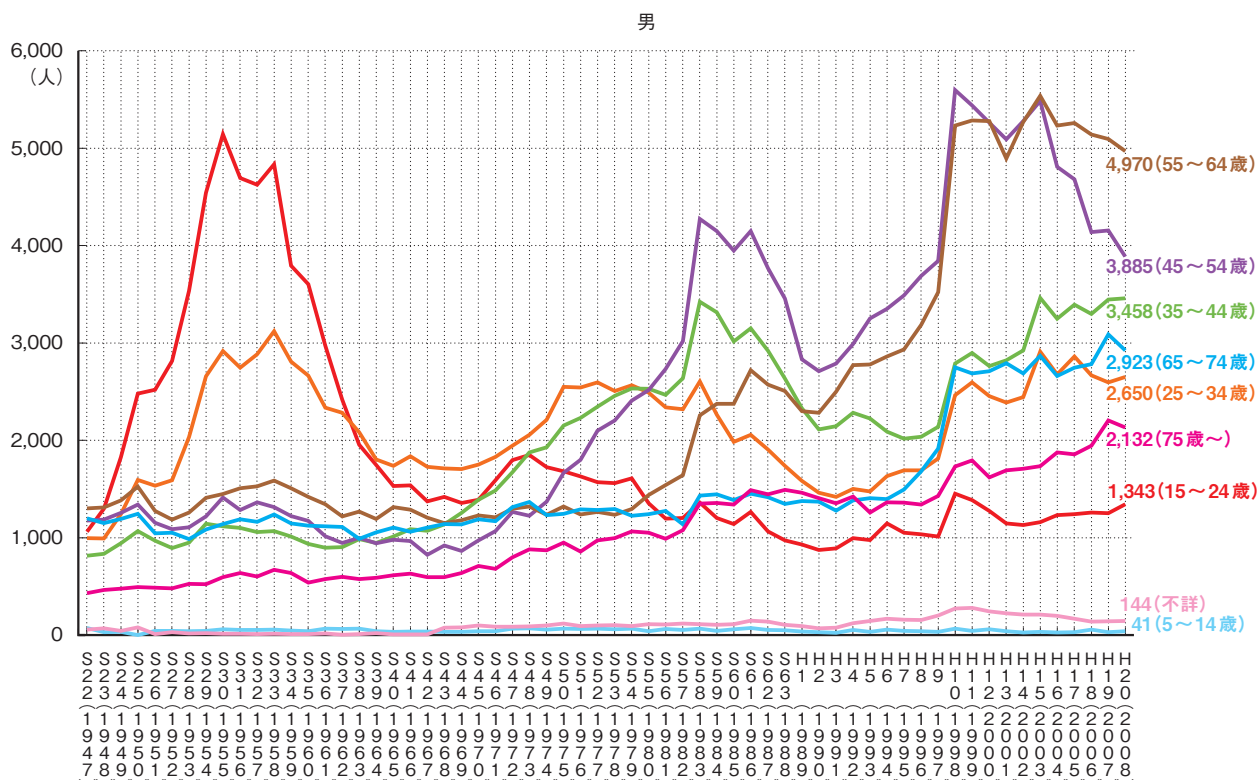
世代別の自殺の状況をみると、青少年（30歳未満）の自殺者数は、近年、全体の10%台前半で推移しており、そのうち未成年は2%程度と、ほぼ横ばいで推移している（第1－7図）が、自殺死亡率はやや増加傾向にある（第1－8図）。

中高年（30～64歳）の自殺者数は、人口動態統計によると、昭和58年に急増した後、平成10年に再び急増し、以後、高い水準のまま推移している（第1－6図、第1－9図）。男性、中でも50歳代の増加が著しく、急増後は、中高年で自殺者全体の約6割を占めている。

また、中高年の自殺死亡率をみると、自殺者数と同様に高い水準が続いているが、50歳代の男性では、平成16年以降は低下傾向がみられる。女性は、横ばい傾向にある。

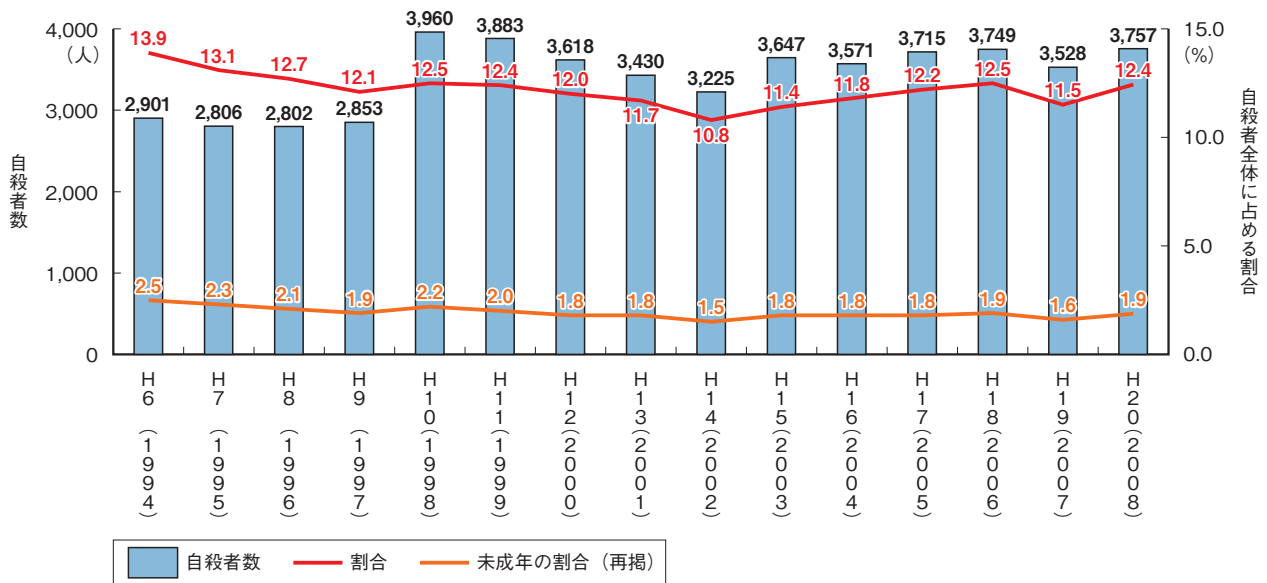
高齢者（65歳以上）の自殺者の占める割合は、昭和50年代から平成にかけて緩やかに増加したが（第1－6図）、平成10年以降は、中高年の自殺者の増加により、相対的に減少している。10年以降、自殺者数は横ばいであるものの、自殺死亡率の高い高齢者人口の増加により、全体の自殺死亡率は、低下傾向を示している（第1－10図）。

第1-6図 年齢階級別（10歳階級）の自殺者数の長期的推移



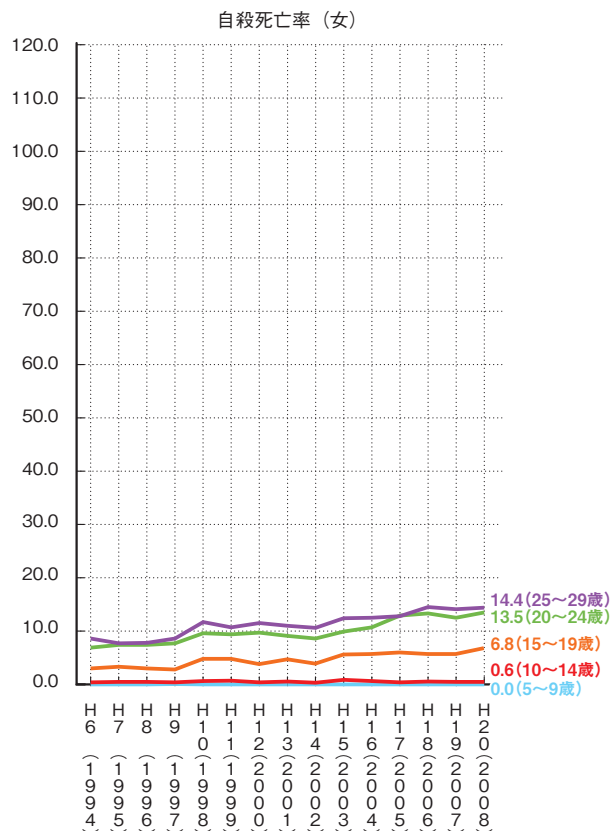
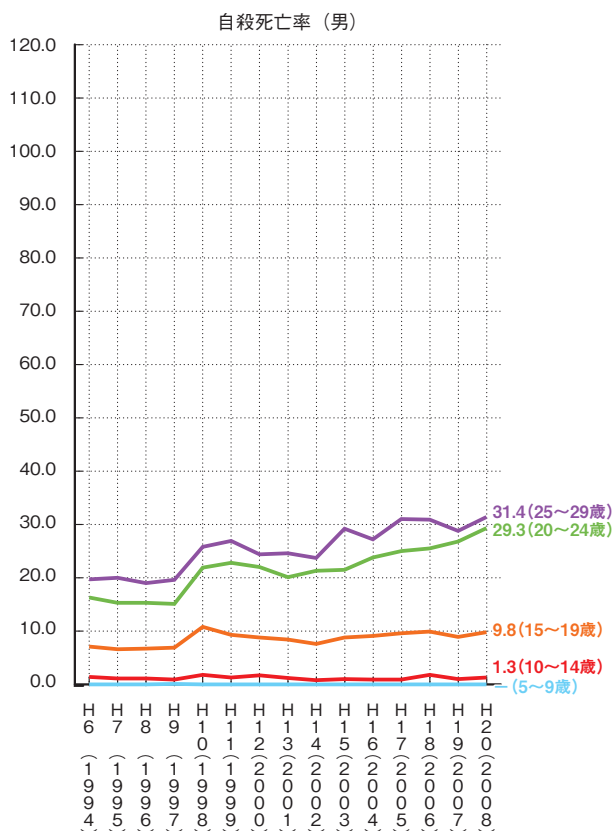
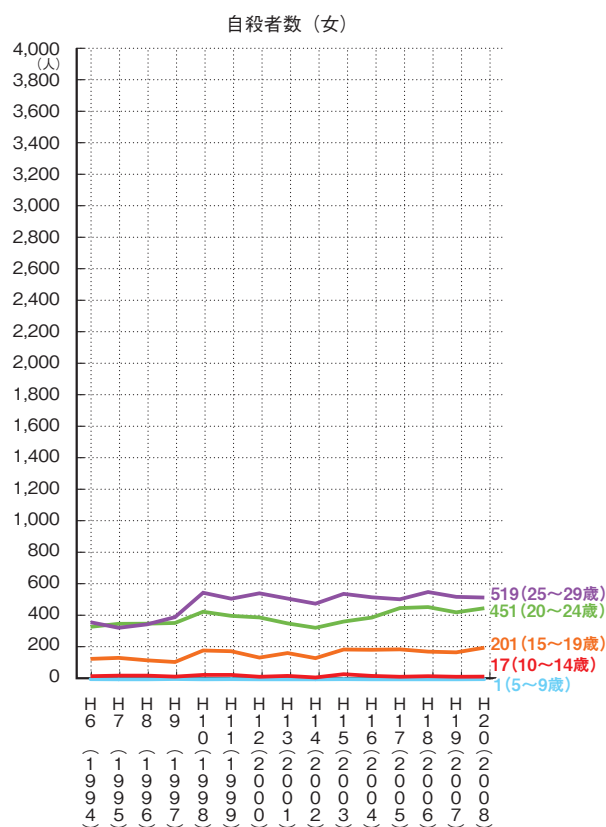
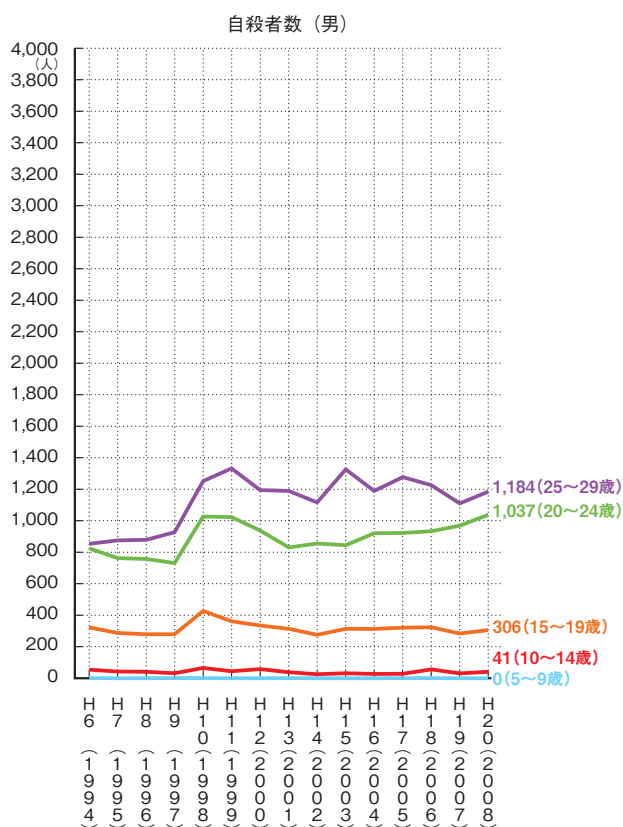
資料：厚生労働省「人口動態統計」

第1-7図 青少年（30歳未満）の自殺者数の推移と自殺者全体に占める割合



資料：厚生労働省「人口動態統計」より内閣府作成

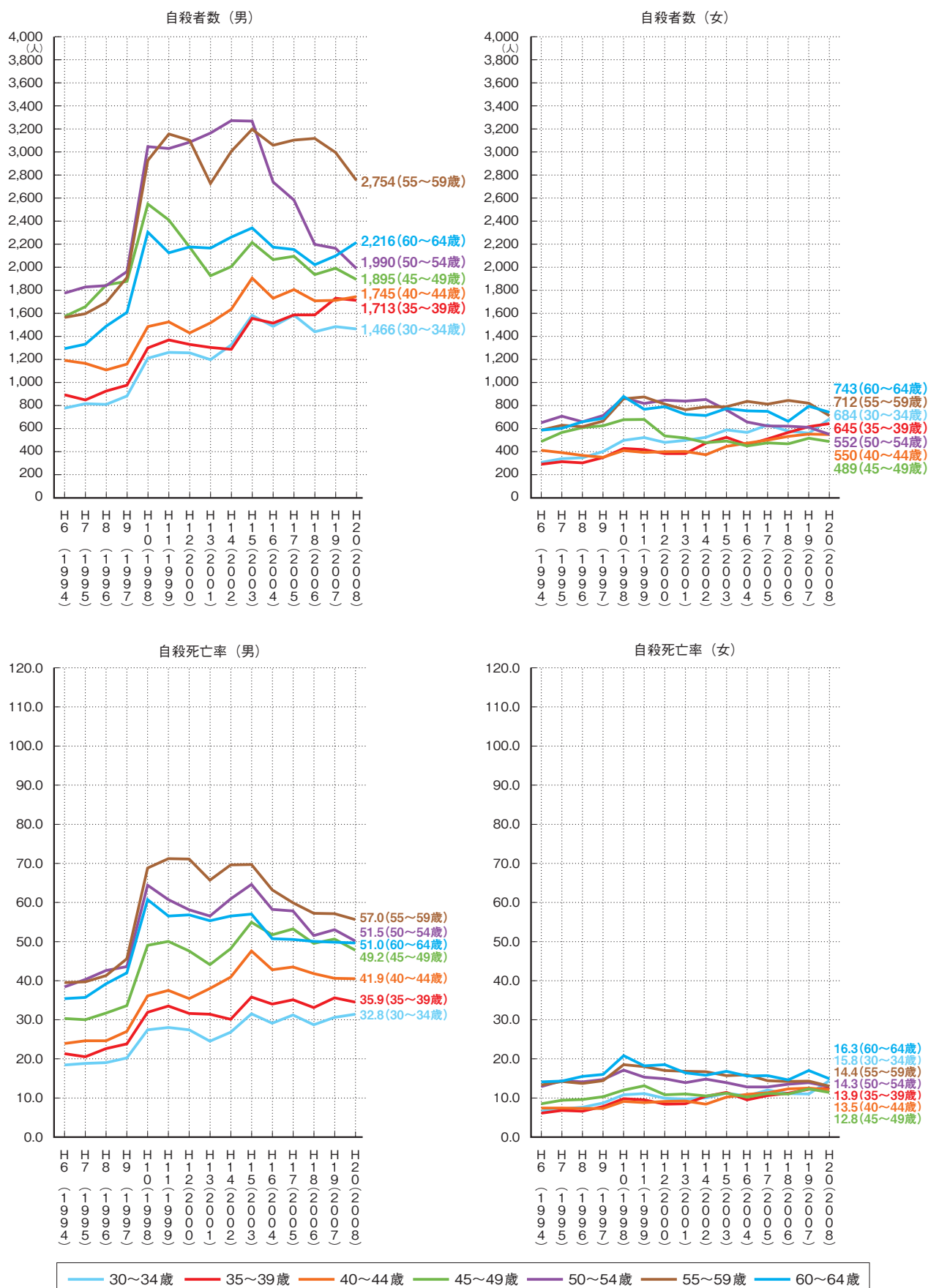
第1-8図 青少年（30歳未満）の年齢階級別の自殺者数・自殺死亡率の推移



5～9歳 10～14歳 15～19歳 20～24歳 25～29歳

資料：厚生労働省「人口動態統計」

第1-9図 中高年（30～64歳）の年齢階級別の自殺者数・自殺死亡率の推移



第1-10図 高齢者（65歳以上）の年齢階級別の自殺者数・自殺死亡率の推移

